

さて、きょうから遠藤周作氏の『わたしが・棄てた・女』という小説を通して、お話していきたいと思います。この小説は、物語の主人公の一人〈吉岡努〉と東京・神田の下宿に同居している〈長島繁雄〉(ん? どこかで聞いたことがある名前! そう、私が少年時代夢中になった野球選手・長嶋茂雄と同じ! ああ、あの頃は世の中の裏表を知らない純粋な年頃だったんだよなあ…。これに関しては話が長くなるので、きょうはここでカット!)、この2人の大学生の話から、【ぼくの手記(一)】(p.7~26)が始まります。あらすじをご紹介します。

【『』内は引用文】

### ぼくの手記(一)

戦後まもなくの時代、食べるものにも不自由している時代です。加えて、2人は青春真っ只中。「ゼニコ(お金)がほしい」、「オナゴ(女性・ガールフレンド)がほしい」と思うのは、あなたは(あなたが男なら)「ああ、そうだったなあ…」と、苦笑いしながら〈あの頃〉を思い出すに違いありません(私、男なので女性のことはよくわかりませんが、女性も同じなのではないか? 同じですよネ?!)。

ま、それはとにかく、大学の学費を稼ぎ、生活していくにはお金が必要です。吉岡はある日、アルバイト探しの中で《スワン興行社》という怪しげな会社に行きます。とにかくお金がほしいのでアルバイトをすることになり、社長の金さんからピラ配りの仕事をもらいます。ピラには「浅草の人気者エノケンが歌う懐かしの名曲 東京のエノケン、遂に桜町に出演」という、あり得ない内容が書いてありました。〈エノケン〉といっても、若い方々には誰かわからないでしょうネ。榎本健一を略して〈エノケン〉と呼ばれ、《喜劇王》と言われた芸人です。その大スターが、千葉県・市川市周辺の村に来るはずはない… と思いながらも、吉岡は食べるために引き受け、出かけます。

ある村の農家の庭先で、古雑誌「明るい星」(当時の芸能雑誌「明星」のことでしょう。)を拾います。その中の読者のページに、「映画の大好きな19歳の平凡な娘。若山セツ子さんのファンならお便りお待ちしておりますわ。… 森田ミツ」という投書を見つけます。これが彼ともう一人の主人公・〈森田ミツ〉との出会いでした。「女の子なら誰でもいいや…」と(この年頃の男なら誰でも… もしかしたら… ですが… たぶん)考えていた吉岡は、ミツに葉書を出し、会うことにします。

### 《出会い その1》

さて、この【ぼくの手記(一)】で遠藤氏が読者に感じてほしいことは、私たちの人生で起こる様々な〈出会い〉の意味、あるいは神秘さであろうと思います。こんな箇所があります。

『これが、ぼくがあの女を知った切掛だ。やがて、ぼくが犬ころのように棄ててしまったあの女との最初の切掛だ。偶然の切掛と考えるならば偶然かもしれぬ。しかしこの人生で我々人間に偶然でないどんな結びつきがあるのだろう。人生はもっと偶然というやつが働いている。長い一生を共にこれから送る夫婦だって、始めはデパートの食堂でお好みランチを偶然、隣りあわせにたべるといふ、詰まらぬ出来ごとから知りあったかもしれないのだ。だがそれが詰まらぬことではなく、人生の意味の手がか

りだと知るためには、ぼくは今日まで長い時間をかけたのである。ぼくはあの時、神さまなどは信じていなかったが、もし、神というものがあるならば、その神はこうしたつまらぬ、ありきたりの日常の偶然によって彼が存在することを、人間にみせたのかもしれない。理想の女というものが現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思っている。……』(p.25~26)

様々な素晴らしい出会いもあれば、なければよかったと思う出会いもあるでしょう。でも、その出会いの一つひとつが私達の人生を創ってきた — という事実は厳然としてあります。そして、この文章にもあるように、それが〈偶然〉だった — という事も事実だと思います。自分が考えもしていなかった出会い。「あの時、あの場所にいなかったら、出会っていなかった」… そんなことがたくさんあるのではありませんか？

### 《偶然》は《必然》…

上智大学夏期神学講習会で、2度ほどお話を聴く機会があった川村信三師は、私たちが人生で出会う両親、友人、知人などすべての人々が『必然の賜物』であり、『一人ひとり私の人生にある確かな「意味」をもつ人びと』であり、『誰一人、私の人生にとって無意味な者はいない。そう考えると、人生そのものが神秘に満ちたものとなる』と書いています。

さらに、私達の多くは〈今〉に満足せず、「あの時、ああしていれば…、あぁなっていたら…」と後悔し、責任を社会や他人に転嫁して、〈今〉を着実に歩んで行こうしない…と指摘しています。そして、『「今」目の前にある道こそ、私に「必然」的に準備された意味あるものなのだと考え始めたとき、すでにその人の人生には変化が生じ始める』と続けます。

川村師の「必然」は、『人がかならずやハッピーエンドになるだろうという特別なあり方を示す』ものであり、『すべてはうまくいくという必然』なのです。この必然についての師の楽天的な考え方は、『キリスト者とは、福音書に描かれているイエス・キリストの生涯を模範とし、人間の力をはるかに超える、善なる方が自分にとってかならずや良き導き手になると信じて、一つひとつの出来事に意味を見出して生きる人』ということを経史上の、あるいは現代のキリスト者の生き方から学んだことからお持ちになったそうです。別の言い方をすれば、イエス・キリストを信じるということは、《自分の人生をすべてイエスに委ねて生きる》という生き方になります。(《委ねる》という言葉については、後日また取り上げたいと思います。)

さあ、あなたのこれまでの人生の歩みをじっくり振り返ってみてください。どんなことが心を占めるでしょう？ そして、遠藤氏や川村氏の言葉、そして吉岡のつぶやきを、どう受け止めるでしょうか。では、次回まで。

### 【引用文献】

- ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』 (講談社文庫、1972)
- ・川村信三 『二十一世紀キリスト教読本 福音は日本の土壌で実を結ぶ』 (教友社、2008)